

私が死ぬとき、私はこの肉体を宇宙に返してゆく。私の肉体は、この宇宙、この地球を構成する物質によって作り上げられた。私の死によって、私の肉体はふたたび微細な物質に分解され、この地球、この宇宙へと回帰する。宇宙回帰の欲望は、私の肉体が宇宙へと返されるプロセスを、自分自身でゆつくりと味わい、そのなかで自分自身の生を肯定し、自分を生み出した宇宙と対話し、中心軸において宇宙と和解し、死の恐怖におびえて全身を震わせながらも、その恐怖を肯定しながら消滅したいと願う。死を超えて私は永続するから、なにも怖がる必要はないという無痛文明からの甘い誘いを振り切つて、私は恐怖のどん底のなかで、あるいは恐怖と関係なしに、みずからを宇宙のもとへと回帰させたいと思う。

私がこの世でどのような生を生きるにせよ、私の生のプロセスはすでに宇宙全体に不可逆的に働きかけ、宇宙全体を不可逆的に変容させ、宇宙全体に何かを与えたはずである。私が宇宙から産み落とされて、この宇宙に存在して、生きて、死んでゆくとは、そのようなやりとりを宇宙と行なうことである。宇宙から生まれた私が、自分自身の生を送ることによって、宇宙に不可逆的な刻印を残してしまうという構造が、そこにはある。たとえ私がどんな人生を送ったとしても、そのすべてのプロセスは、吸い取り紙

に落ちたインクのように、そのまま宇宙へと染みわたっていく。それは時の経過とともに、宇宙の星くずの彼方にまでゆっくりと浸透することだろう。地球がなくなり、太陽系がなくなったそのあとですら、浸透は続くことだろう。私が死んだあと、もはや私の一部ではなくなった何ものかが、それでもなお私の人生を通り抜けた何ものかとして、宇宙の果てまでみずからを貫き通していただくろう。その何ものかはやがて変容し、かつてのそれ自身ではないような姿に形を変え、その中に刻印されていた私の痕跡も徐々に薄らいで蒸発してしまうだろう。その痕跡が消滅したとき、私は、私固有の痕跡をどこにも残していないという形で、宇宙へと記憶される。私は、みずからの固有の痕跡の完全な消滅をもつて、宇宙に記憶されるのである。みずからの名前や功績を後世に残すことによつて私が記憶されるという解法ではなく、みずからの固有の痕跡を宇宙からしずかに消滅させることによつて私が記憶されるといふ解法がある。解決できない恐怖と不安に苛まれながら、自分の肉体と自分の存在が宇宙へと回帰することを自己肯定し、自分の肉体を、運動機能を、大切な人に触る手触りを、思考能力を、視力を、聴覚を失つてゆく。宇宙と対話しながら、自己と対話しながら、最後の最後まで、自己肯定と深い納得のもとで、この肉体を解体され、この精神を解体され、自分自身を失つ

てゆきたい。生命の欲望をこのような形へと導いてゆく知が、「宇宙
回帰の知」である。

（書籍版に続く・・・）